

批評・紹介

森 正夫編

江南デルタ市鎮研究

——歴史學と地理學からの接近——

小 島 泰 雄

對象としての市鎮と方法としてのフィールドワークとを共有して、歴史學と地理學の研究者が行った共同作業の成果として、本書は刊行された。六章からなる相互に獨立した論文の紹介に進む前に、まず本書の成立について森正夫による序章「江南デルタの市鎮——實地調査及び歴史學・地理學による検討の試み」との對話を進めてゆきたい。

そのフィールドワークは名古屋大學の中國史研究者と地理學研究者によつて、一九八八年夏の一箇月間に江蘇省と上海市の十六の市鎮において、さらに翌年秋には十日程かけて上海市の二つの市鎮、青浦縣朱家角鎮・寶山區羅店鎮において實施されたもので、有志の參加した豫備・補充調査を含めると計四度にわたるかなりの規模のものとなっている。フィールドに江南農村が選ばれたのは、そこが過去から現代へと一貫して中國經濟の中核であり續けたことによるとされる。ここには歴史的な考察に止まらない、研究者の同時代的

な關心が表明されていると見なされるのであるが、この點については各論を整理した後で改めてふれることとして、本書を特徴附ける研究方法としてのフィールドワークの意義から考えてみたい。

森正夫は、實地調査は文獻では得られない研究對象の多面的把握を可能にし、さらにそれが文獻理解を深いものにすることを指摘する。フィールドワークの資料収集という機能については、すでに近代華北農村を對象とした日中共同研究による在地資料、特に口述資料を中心に整理した大部の成果が刊行されており、贅言を要しないであらう。文獻理解を深めるといふ點ではむしろ、フィールドワークの日程表に「景觀調査」として表されるにすぎないもの、すなわち對象地域へ出掛けることそのものの意義を評價する必要がある。

フィールドワークを中心的な方法論とする地理學研究におけるその重要性は言うまでもないが、近年展開されている場所の意味論⁽²⁾を想起すれば、歴史的な文脈で場所との對話を重ねることに長じた歴史研究者にとつても、場所の經驗がその研究に資することは疑いないことであらう。フィールドワークと各論考との關係は個々の論述の中で明示的に述べられているが、それ以上にフィールドワークはその立論および文獻利用の諸局面に影響を與えていると考えられるのである。

續いて調査・研究の對象である市鎮について述べたい。森正夫は農村部の都市的集落を歴史的な意味を託して市鎮と呼ぶとしているが、その名稱および本書での用例から判断すれば、市鎮とは定期市である「集市」と地方町である「集鎮」を統合した概念と考えられる。集鎮に居住する者の構成は現在でも、鄉鎮企業⁽³⁾の發達程度にもよるが、三〇から九〇パーセントが農業人口とされることから、市

鎮は農家と商家などの非農家とが集住する集落、またその機能に着目すれば農村性と都市性とを併有する集落とみなされる。

本書においてこの市鎮が對象に据えられた理由は、序章に提示された假説に明確に語られている。すなわち上述の江南の先進性が「蘇湖熟、天下足」(『吳郡志』卷五〇)などと稱される豊かな農業生産力のみに依據するものではなく、市鎮のネットワークと深く関わって生み出されたものであるとする假説である。この假説の檢證が本書の目的とされるわけであるが、すでに述べたその方法論的特徴を勘案すればその接近法として、具體的な市鎮の發達史やその要因などに關する歴史的研究と市鎮の機能・構造などに關する地理的研究が擧げられよう。さらに中心地・定期市の研究の成果に照らして、市鎮集落とその勢力圏という空間的觀點からその檢討課題を整理するならば、市鎮集落については、定期市をはじめとする中心機能、集住地の自然・交通などに關する立地條件、集落システムの相互依存・階層性などの説明が擧げられよう。また市鎮の勢力圏については、市場圏の劃定とその機能・構造を、財の移動に還元される經濟的關係、支配・被支配の政治的關係、スキナーの市場圏社會に代表される社會的側面、言語の均質性に象徵される文化的側面から説明することが擧げられるであらう。

本書はこうした課題について、歴史學と地理學の研究者六名がそれぞれ獨立したテーマとアプローチにより説明を進めた六つの論考をその主體とする。この本書の體裁に従って、以下、各論考について個別的な紹介と拙評を展開してゆきたい。その際、評者が中國農村をフィールドとする人文地理學的研究に従事している者であり、各論考の紹介・批評の視點も地理學的にならざるをえない點をご承

知いただきたい。それにもかかわらず歴史學の學術雜誌に書評の機會を與えて下さった編輯諸氏に、この場を借りて感謝の意を表させていただきます。

II

第一章は海津正倫の「中國江南デルタの地形形成と市鎮の立地」である。海津論文は江南デルタを地形に従って四地域に區分し、その形成過程について新たなモデルを提示したうえで、地形區分と市鎮分布の關係に言及したものである。

地形による地域區分と地形形成過程の復元は並行して進められているが、まず衛星畫像分析と現地調査の結果導き出された地形區分から整理してみたい。その區分された四地域とは、江南デルタの北部の鎮江から無錫にかけて海拔高度のやや高い上位面とそれを刻む淺い谷の下位面が存在する地域、中央部の太湖および湖沼群の分布する地域、南部の嘉興附近から浙江省にかけての淺い樹枝狀谷に刻まれるやや高燥な地域、東部の長江右岸の砂堆の發達する地域の四つである。本書三三頁に圖示されたその地形分類は、既往の地形分類圖と比較すると、江南デルタの北部と南部に臺地の分布を廣く認める點に特徴を見いだすことができる。この臺地は表層に確認される黃土の花粉分析からは、更新世末期に形成された洪積臺地であることが明らかにされている。

江南デルタの地形形成過程については、まず錯綜した見解の整理が行われ、後氷期海進による海灣が砂州形成にともない潟湖化し、その陸化によって江南デルタが形成されたとする通説などが紹介されている。著者はこれらの諸説に對して、ボーリング・データ、特

に湖沼地域の泥炭と崗身地帯の貝化石の放射性炭素年代測定法による分析から、完新世中期の六千年前頃に、崗身地帯より内側に泥炭地と汽水域の交錯する環境が存在したこと、崗身が南北の洪積臺地の間を結ぶ灣口砂嘴の状態で發達したこと、さらに以後崗身の外側には長江の堆積作用により砂堤列平野が形成されたことを推定している。本書四八頁に圖示された地形形成過程のモデルは、データ不足による限界を内包するものの、現時点での到達点として高く評價されよう。

こうして形成史的検討の加えられた地形環境が市鎮立地にいかなる影響を與えたかについて、最後の一節を割いて考察が行われている。一六世紀初頭の蘇州・松江府の市鎮分布について、分布密度の高い嘉定・太倉が崗身地帯に屬し棉作地域であること、分布密度の低い吳江・華亭が湖沼地域に屬すること、南北の臺地部や東部の砂堤列平野部が中間的な分布密度を示すことを述べ、市鎮の分布が地形環境の影響を受けた經濟活動の相違を反映していると想定する。興味深い指摘であるが、たとえ分布が相關しているとしても、地形環境・經濟活動・市鎮それぞれの關係が未解明であり、一定の結論が提示されたと見るより、むしろ問題提起がなされたと捉えるべきであろう。

第二章は森正夫の「朱家角鎮略史」である。森論文は上海の西方四〇キロメートルに位置する朱家角鎮を對象に、その成立から現在に至る「都市的集落」の盛衰を、特に商業活動に着目して通時的に敘述したものである。

明清期の朱家角鎮の發展は、文獻史料に據りつつ概略次のように描かれている。一六世紀に棉花・綿布の取引を基盤として成立した

朱家角鎮は、清初には郷兵が組織されていることから地域社會としての内實を形成しつつあったとされる。さらに乾隆一三年の朱家角鎮の米價暴動に關する史料から、市街地が形成され商店が密集した姿を想定し、米問屋とその米の取引が重要度を増しつつあったことを明らかにしている。また乾隆「青浦縣志」に見られる朱家角鎮の士人層に關する記載からは、一七世紀後半から一八世紀末にかけての商業利潤の蓄積が當時の支配階級である士人層の充實を生んだとする。そして嘉慶「珠里小志」が唯一の鎮志であることから朱家角鎮の發展は一九世紀初頭に一定の段階に到達したと推定し、その記載からは地元の農村の家内工業で生産された綿布と米が中心的な商品になっていたこと、および「珠里」の領域が都市的集落としての朱家角鎮のみならず周圍の農村を含むことを明らかにしている。また太平天国の反亂は朱家角鎮を荒廢させたが、回復は速かったとしている。

朱家角鎮の近現代における展開は、方法的に本書を特徴づけているところの現地での聞き取り調査を中心とし、それに地方志や滿鐵調査報告書などの文獻史料を結合させることによって次のように再構成されている。インフォーマントである一九二〇年代生まれの商業従事経験者の共通認識から、革命以前の朱家角鎮は三〇年代に繁榮のピークを有し、それは一九四〇年に松江で實施された滿鐵調査が小農の窮迫販賣に立脚する商業資本と描いたものであるとの留保を慎重に附け加えながら、この繁榮を支えたのは米行の米取引であったとしている。さらに聞き取りの成果と新地方志の記載を比較しつつ、こうした米行は一九世紀末に創業したもので、水上交通網の整備と米の主要移出先である上海市場とを背景に發展したもので

あることを明らかにしている。そして米行發展の要因として良質な産米とその確保を可能にした周圍百里とされる廣域な集荷圈の存在とを挙げ、資金規模が大きく、買い上げ價格が高く、信用も厚いという米行の條件と共に、卸賣・小賣・サービスの多業種の集積という朱家角鎮の都市的集落としての特徴がその廣い集荷圈の成立要因であるとする。朱家角鎮の米行はその後、日中戰爭期に米の集荷・出荷兩面で困難な狀況に陥り、代替的な小型の米行の叢生により相對化されたまま、革命後の食糧制度のなかでその役割を終えたのであるが、著者は以上の朱家角鎮の盛衰に関する認識に基づいて、現在の朱家角鎮をめぐる二大改革である鄉鎮合併・新都市計畫について、鎮を中心とした流通機構を郷の生産・消費と結び附けることが再生への道であるとの提言で本章を結んでいる。

第三章は稻田清一の「清末江南の鎮董について―松江府・太倉州を中心として―」である。稻田論文は市鎮とその周邊農村を包含した空間が行政領域的性格をもつに至る過程を、清末江南の「鎮董」をめぐる議論の中に整理したものである。

まず清末江南の地方志に散見される「董」のつく役職名を整理し、それに市鎮名がしばしば冠されることから市鎮の幹事ともいふべき役職を推定し、鎮董をその總稱とする。そして鎮董は市鎮に居住する工商地主的な存在であり、また生員クラスに属することから地域社會代表と支配機構末端の二面性を有していたとする。鎮董の仕事には救恤・水利事業をはじめとした多面的な活動がみられ、これらの活動自体は鎮董に始まるものではないが、商捐など附加税化した市鎮の財源に依據した活動であることから、鎮董の下に制度化されていったと解釋する。

續いて鎮董の管轄領域が論じられている。明代以來の行政領域である郷―保―區―圖は清末には實質性を喪失した區畫名となっていたとして、民國『青浦縣續志』の平糶の記事を資料に、鎮董管轄領域と郷―保―區―圖および市鎮との對應關係を具體的に検討している。その結果、鎮董管轄領域は、保―區とは無關係に、市鎮を中心にしてその周邊の圖を編成したものであることが明らかとなった。さらに同一地方志に據って、宣統年間に設定された地方自治の行政領域がこの鎮董管轄領域を繼承していることを指摘している。そして、鎮董の用語的初見からこうした領域の成立を、縣によって偏差はあるものの、太平天国より前、同治年間以前として、江南に「鎮董制」が定着してゆく狀況を想定する。

この稻田論文をいわゆる歴史的領域研究に位置附けるならば、順莊編里以降の基層レベルの行政領域に関する研究の空白を埋めるものと評價される。また明末清初以來の市鎮の發達とそれに伴う市鎮在住の商人・地主の伸長、すなわち著者が糧長あるいは郷紳地主との距離測定から命名した「鎮居地主」の影響力の擴大が、鎮董およびその管轄領域を生んだとする筋書きは、自生的な市場圏が行政領域として制度化されてゆく過程を想定していると読み替えることも可能であり、市場圏の政治經濟的な研究へ道を開くものとも言えよう。

第四章は高橋芳郎の「中國における人民調解委員會―上海市青浦縣朱家角鎮の場合―」である。高橋論文は中國的特徴を示す紛争解決機關としての調停委員會を、朱家角鎮での聞き取り調査で収集したデータの提供を主目的としつつ、紹介したものである。

まず既往の研究に基づいて調停（原語は「調解」）委員會を、明

代里老人制などに見られる民間の調停が民事的紛争と輕微な刑事的紛争とを對象に公權力の裁判と並存してきた歴史的文脈のなかに位置付け、一九五四年の《人民調解委員會暫行組織通則》で明文化されたところの大衆的自治組織と規定している。調停委員會を中國的傳統として理解するこの方向は、後半に採録される聞き取りでも繰り返し問われており、本論文の一つの特徴をなしている。續いて調停委員會の構成と機能について、五四年の通則と八九年の《人民調解委員會組織條例》に基づいて整理が行われている。その主要點は、條例により明確化されたように委員會の設立單位は行政末端的の村民委員會と居民委員會であり、鄉鎮など基層政府の司法補佐員による指導を受けること。委員會の自發的な調停も可能であるところの對象となる紛争は、通則では民事と輕微な刑事案件であったが、條例により民事に限定されており、統計的には婚姻・土地・家庭に關するものが多いこと、調停は裁判とは獨立しており、必然的前置ではないことなどである。

後半部では八九年の朱家角鎮での聞き取りを一次資料的に提示しているが、著者自ら述べるように、その大略は上述の整理および既往の研究成果の枠を越えるものではなく、調停委員會が基層において紛争解決の機能を發揮していることの實態的再確認の作業とみなされる。ただし、運用面では調停が裁判の前置的な性格をもつことが確認されることや、公安部門との連携のもとで輕微な刑事案件が調停されていることなど、實際の事例を交えて語られており説得的である。著者は調停の成功率の高さの要因を委員會機構とは別次元の委員の人物的信頼に基づいた人治的性格に求め、その歴史的類似性を近代以前に見いだすが、評者の農村調査の経験では、共時的に

も調停は多様なコミュニティ・レベルで重層的に試みられており、そこでは機構と人物の未分離狀態が觀察されることを附言しておきたい。

第五章は林上の「上海市周邊地域における集落システムの空間構造」である。林論文は上海周邊農村の集落の分布パターンを検討し、中心地理論を援用しながらそのシステムの解明、およびモデル化をめざした意欲的なものである。

本論文で展開される集落システムの研究とは、中心地研究が商業・サービス業の集積した都市的集落システムの研究であるのに對して、農村的集落を含む集落の包括的な空間構造の研究とされる。論考はその中心地研究の主たる成果のひとつであるシステムの階層性についての検討から着手されている。階層性は一般に規模に關する指標を用いて説明されるが、資料的制約から《上海市全圖》に載る集落の行政的區分を代替的な指標とし、鎮・鄉・村の三レベルの集落の階層を提示している。本論文にはこうした代替的アプローチが散見され、立論の限定あるいは限界を踏まえて讀み進めることが讀者に要求される。例えばこの集落の階層性については、その分析對象となっているのは行政末端的の村民委員會所在地の集落までであり、農村の景觀的な集落、江南地域では多くが小村あるいは列村の形態をとって存在する集落のすべてが組上に載せられるわけではなく、その意味で行政的中心性を有した集落を對象とした分析であると限定して理解する必要がある。そして經濟的な中心機能から言えば鄉あるいは鎮のレベルに相當する地方町としての集鎮も行政的指標からは村レベルに組み込まざるを得ないという限界も内包している。こうした限定・限界が、後出の集落人口規模の分析における

鎮・郷・村の各レベル内での變動係數の高さの一因ともなっていると考えられる。

續いて同一の資料に基づいて、集落の分布パターンについて、點の集中・分散を測る統計的手法である鄰接單位法を用いてその分散の性格を明らかにし、さらに集落の勢力圏として行政領域を取り上げ、とくに形狀指數や相互の接觸數に注目してその四角形的特徴を指摘している。そして格子狀の水路網に代表される上海周邊農村の地形・交通條件がこうした形態的特徴と關連することを想定している。

以上の個々の檢討結果である集落システムの空間特性、特に階層性と分布パターンに注目して、著者は正方形の集落システムを空間モデルとして提示している。このモデルの檢證・修正は、もとより具體的なデータに基づいてなされるべき今後の課題と考えられるが、本論文で展開された議論に即して言えば、交通原理を體現するという縣城間を結ぶ四本の軸と、現實の交通の分析から導き出された上海を中心とした放射狀の交通網との關係など、地域内にある上海を敢えてモデル構築の對象から除外した論理を明確にすることも、モデルの檢證のためには必要な手續きと考えられる。

第六章は石原潤の「蘇州市とその周邊における集市の現況」である。石原論文は傳統的定期市である集市の特性について全國的な概觀を行ったうえで、蘇州市および吳縣での實態調査から集市の現況の一端を明らかにしたものである。

まず一九八七年出版の《全國主要集市名冊》を資料として、東部沿海地域を中心とした十一省市の集市を對象に、その呼稱法・所在集落・取り扱い品目・出店數・設備・交通條件について、集計レベ

ルでその特性の把握が行われている。分析は資料の分類に基づいて、農村集貿市場・城市集貿市場・專業市場・農副產品批發市場の四タイプの集市の比較を中心に進められ、前二者はその取り扱い品目から農産物の小賣市場として共通した性格を有しながら立地が農村と都市に分かれていること、專業市場は特定商品に特化した専門的な市場であること、最後者は都市に立地する農産物卸賣市場が主であることを明らかにしている。また記載集市名は、「市場」「集市」の附くものが多く、傳統的な地域的呼稱法である華北の集・江南の市・四川の場・華南の墟などは繼承されていないことが判明した。

つづいて、一九八八年に實施したフィールドワークによって、蘇州市街地の城市集貿市場と專業市場および吳縣木瀆鎮の農村集貿市場について、集市の分布と構造さらに賣り手の屬性が検討されている。集市の實態的分布の把握された市街地については、中心部に一キロメートル程の間隔で集市がほぼ均等に分布する状況や、都心と城門に規模の大きな集市が立地する傳統的パターンの存在が指摘されている。また集市の構造については六つの集市の平面圖による形態的な解明が目指されており、品目別に賣り手の分離が圖られていること、その品目構成からも明らかのように、しばしば鄰接している公設の菜場に代わって生鮮食料品の主要な供給の場となっていることなどが指摘されている。また賣り手の標本調査からは、三〇分から一時間程の所から極めて高い頻度で參集する農民が自作の農産物を賣っている状況が描かれ、少數ながら小商人が存在することも指摘されている。末尾で著者自ら多くの課題を設定しているが、悉皆調査と農村の集市の把握の必要性を評者も敢えて繰り返しておき

たい。

III

以上の各論考を経て先に提示した本書の検討課題と対照すると、森論文は中心機能の集積を、稲田論文は行政領域の編成を、高橋論文は地域社會をそれぞれ歴史的に解明しようとしたものと解釋され、海洋論文は市鎮立地の自然條件を、林論文は農村集落システムを、石原論文は定期市の形態をそれぞれ地理的に解明しようとしたものと位置付けられる。各論考が課題をどの程度解明しえたかについては、それぞれの研究史の文脈のなかで評價されるべきことで、拙評の試みの範囲では十分明確にすることはできなかった。そこで以下では残された課題について、とくに市鎮の地域社會と兩義性の問題に絞って考えてみたい。

森論文は中心機能の集積を歴史的に跡附けながら、地域社會の形成にも目をむけている。「廣い意味での再生産の場としての、人間が生きる基本的な場」とする森正夫の概念規定からすれば、地域社會は具體的な領域性をもつ概念と解釋されるが、市鎮をめぐる地域社會とは、集住地の鎮商によって構成される社會を指すのか、それとも市場圈社會的な勢力圏内の農民を含む社會を指すのか、行論上やや錯綜しているように思えた。市鎮レベルでは、稲田論文が地域社會の自律的側面を市場圈に對應する鎮董管轄領域に求めていることにも表れているように、後者に森の言う「基本的な場」を見いだしようという感想を評者は抱いたのであるが、いずれにしてもその解明は地域社會の結合契機に立ち戻って検討すべき今後の課題であらう。その場合、中國農村の生活空間が市場圈のみならず、村落

あるいは、より上位の空間に重層的に展開していると考えられることから、社會關係の空間的重層性に注目することが、單獨の關係に收斂することによって生じた共同體論の行き詰まりを繰り返さないためには重要と考えられる。

市鎮の兩義性については、本書からは二つの方向で議論を展開することが可能であらう。ひとつは都市性・農村性として既に指摘したそれである。都市性とは空間的には中心地システムを通して市鎮が基層に据えられるところの、より上位の中心地・都市との關係の下に捉えられるものである。林論文はこの都市性を集落システムを通して検討したものであるが、要素間の結合關係、この場合は集落間の流動などの解明が課題として残されている。一方、農村性とは市場圈社會に代表される、市鎮と農民との關係、あるいは市場圈内の農民相互の交流として捉えられるものである。石原論文が明らかにするように、現在でも定期市としての集市への参集者はほとんどが農民であり、市鎮は第一義的には農民の局地的取引を前提として成立していると考えられる。森論文では市鎮發達史を論述するにあたって商業という中心機能の中でも、その都市性に焦點が合わされていたが、農村性の解明についても一歩進めることが今後の課題として提示されよう。ただ、この都市性への偏倚は、その中心機能に關する記述からして朱家角鎮が階層的にやや高次の中心地、スキナールのいう中間市場町あるいは中心市場町にあたるため、すなわちフィールドの特性が都市性を強調するものであった影響とも解釋される。

市鎮の兩義性のもうひとつは、そこが支配と自治の接點となっていることである。稲田論文はこの兩者の關係を鎮董管轄領域の成立

を通して解明したものであり、高橋論文は調停という支配と自治の相互補完的機能を論じたものとみなされる。また林論文では分析に際して郷鎮レベルの行政領域をもって市鎮の勢力圏にあてているが、その前提には郷鎮の行政領域を實質地域とする認識がある。これら相互に獨立した論考の理解に共通して必要とされるものは、支配の末端でありかつ自治的でもある行政領域に關する通時的な解釋であり、その解明が待たれるのである。

こうした課題を通して本書を顧みると、やはり、その方法的な特徴でもあったフィールドワークに起因する限界が、各論考を強く規定している姿が浮かびあがってくる。そのフィールドワークは規模自體は課題に答えるに足るものであったが、序説で苦澁を帯びて述べられているように、外國でのフィールドワークには避け難いところの試行錯誤により計畫通りの實施ができなかったのである。別表として列記されたその計畫が豫定通り消化されていたならば、どんなに素晴らしい成果がもたらされたかを考えると、まったく残念でならない。しかし、限られたデータで、しかも副次的なテーマで構成されたにもかかわらず本書の成果を得るにいたったことは、その目指した方向の正しさを表していると斷言できるであらう。

最後に本書の同時代的關心について述べておきたい。フィールドワークの實施された中國農村の現状に目を戻すと、その經濟發展の先導役となっている郷鎮企業が浮かび上がってくる。この郷鎮企業を核とした「離土不離郷」型の、換言すれば非都市化型の開發の理論的・政治的基礎として、費孝通の提唱する小城鎮論が存在する。⁽²⁾この鶴見和子によって内發的發展論を體現するものとして高く評價された小城鎮とは、本書の市鎮に對應する實體を持つものである。

序章において森正夫は、小城鎮をめぐる費・鶴見が指向する現状分析に對して、本書の市鎮研究は市鎮の歴史的・地理的條件の解明を通して現状分析に不可欠のデータを提供することができると述べている。江南というサブ・システムの有する先進性の解明が中國全體の發展方向を考える上で重要となるという考えには首肯しうるが、そのためには江南に限定されないデータの蓄積が必要であり、それは本書からの市鎮研究の發展方向のひとつであらう。それはともかくこの同時代的關心こそ六名の共同研究者に共有されたものとして、またフィールドワークという方法論から導き出されたものとして、本書の通奏低音となっていたと言えるであらう。その上で歴史學と地理學の共同研究がその分擔關係を明確にしながらも、海洋論文における市鎮發達史への取り組みや稻田論文の空間性への着目に現れているように、學問的な相互交流を形作りつつあることが看取された。末尾に附された市鎮研究の學際的文獻目錄も語るように、共同研究が専門的により廣いかたちで行われ、中國の市鎮というフリーナでより刺激的な議論の展開される時が間近になったことを期待させる本書の登場であった。

註

(1) 佐々木衛編『近代中國の社會と民衆文化』（東方書店、一九九二年）三九八頁。

(2) エドワード・レルフ著、高野岳彦ほか譯『場所の現象學』（筑摩書房、一九九一年）二七四頁。

(3) 金其銘《中國農村聚落地理》（江蘇科學技術出版社、一九八九年）四頁。

- (4) 中心地研究については、森川洋『中心地論(Ⅰ)(Ⅱ)』(大明堂、一九八〇年)四六六頁、定期市研究については、石原潤『定期市の研究』(名古屋大學出版會、一九八七年)四〇五頁がそれぞれ詳しい。
- (5) 『中國自然地理圖集』(地圖出版社、一九八四年)一二三頁。渡部忠世・櫻井由躬雄編『中國江南の稻作文化』(日本放送出版協會、一九八四年)八〇～八一頁。
- (6) 拙稿「現代中國の生活空間——江蘇省六合縣のばあい」(『史林』七四—三、一九九一年、一〇三〇頁)。
- (7) 費孝通『小城鎮四記』(新華出版社、一九八五年)一四九頁。
- (8) 宇野重昭・朱通華編『農村地域の近代化と内發的發展論』(國際書院、一九九一年)五二二頁。
- 一九九二年八月 名古屋 名古屋大學出版會
A5判 二八二頁 五、八〇〇圓